

## 私と姉の、姉妹の形

【あらまし】

私は姉が嫌いだった。決して円満とは言えない家庭の中で、心の内を言える人などいなかった。姉より優秀に、良い子に、そして強くなるために歯を食いしばった。それと同時に疎遠になっていった、私たち姉妹の関係は、姉の進学をきっかけに徐々に変化していく。たくさんの手紙から受け取った姉の優しさ。私は、私の本当の気持ちに気づいてくれた姉に感謝している。私には今、心強い味方がいる。姉との記憶をたどることで、これからの自分のあり方を見つめ直す。

似ているのは声だけ

昔から声だけは似ていると言われていた。私自身はあまり感じないのだが、今でも母を迷わせるほどだから、似ている方なのだと思う。しかし、現在の私と姉の共通点など、本当にそれくらいだ。顔や体型はもちろん、服の趣味や好きな音楽のジャンルも違う。私がどれにしようか決めかねている横で、姉は5秒でレジに向かっているし、文庫本の棚で足を止める私をよそに、姉は漫画の新刊コーナーに歩みを進めている。

また、私は絵心や芸術センスといったものは皆無に等しいが、姉は美術部や写真部に所属し、デザイン系の専門学校へ通って

いた。それから、「明日から沖縄行ってくる」とか、「スウェーデン人とツイッターでやり取りしてる」とか、行動力のない私には考えられないようなことも、驚くほど普通のテンションで言ってくる。これが今の私と、私の姉だ。

足跡をたどって

今でこそ、それぞれの色がはつきりしてきたが、思い返すと、私は姉の影響を大きく受けていたと思う。ピアノ教室に行き出したのも、習字を習い始めたのも、陸上競技クラブに入ったのもすべて、姉が先に始めていたからだ。姉のしていることは、私もするのが当たり前だと思っていた。だから3年早く小学校に入学した姉がひらがなを練習しているのを見て、保育所に通う私も自分の名前が書きたくて練習したし、九九の歌も一緒に歌った。

保育所には夏休みがないから、学校に行かない姉を見て自分も行かないと言いだした私のために、姉は夏休みもいつもの時間にランドセルを背負って部屋を出て、私が保育所に行く時間まで3階にいてくれたという。私のわがままに付き合ってくれる優しい姉だった。

昔のアルバムには、2人の笑顔がたくさん咲いている。姉は当たり前のように側にいる存在だった。そんな私も、姉がしていたスイミングとそろばんだけは足を踏み入れなかったから、幼いなりに選別はしていたのかもしれない。

そして、聞こえは悪いが、私は姉の「失敗」も利用した。例え

ば、中学生になった姉が英語に苦戦しているようすを感じ取ったから、まだ小学生だったが英語塾に行き始めた。成績が振るわない姉を見ていたから、私は勉強に力を入れた。私は姉の通る道を通り、障害物がある所を事前に知り、備えることができた。私は姉のおかげで、大好きなピアノにも出会えたり、大切な経験のひとつになった陸上競技にも打ち込めた。道標はいつでも、私の前にあった。

## 変化の波

私が小学校に入学し、初めての夏休みを迎える前に、一緒に暮らしていた祖父が亡くなった。前日までは元気だったのに、倒れて数時間後にはもうだめだった。私はまだわけが分からず、病院で泣いている祖母を不思議そうに見ていた。それでも火葬場で大泣きしたことは今でも覚えている。

両親が共働きで、昔から祖父母に面倒を見てもらっていた私たち姉妹は、祖父との思い出も多かった。初めて触れる、大好きな人の死だった。祖父は家族みんなから愛されていたから、祖父のいなくなった家の空気は変わった。祖母はすっかり意気消沈し、穏やかな性格も変わってしまったようだった。家族は対立することが増え、両親の不和も感じるようになった。気のせいだと思いたかった。

それ以降、この先も一生忘れることはできないことが、立て続けに起こった。私も姉も慕っていた先生との早すぎる別れ、姉の友人で、私とも仲良くしてくれていた子の登校拒否とその母

親の死。そして、私の過失が原因で始まった仲間外れ。当時私は、平気で悪口を言ったり、自己中心のだったりと性悪な人間だったから、嫌われたのも無理はないと今は思える。

でも当時、友だちとは上手くやっていると思っていた私にとって、これは衝撃的なことだった。このような類のことは子どもの間ではよくあることかもしれないが、とても怖くて、今でもその恐怖を拭い去ることはできていない。このように、私と姉は感情を振り回され、しつかりした「悩み」を持つようになっていった。私も姉も、どこか疲れ始めていた。

## 信じた道は行き止まり

家族がうまくいっていないことは、確信に変わった。今でも脳裏に焼きついて離れない光景はいくつもある。どうすればいいかわからず、大人たちの顔を伺う日々が続いた。

姉は高校生になった。姉の成績では難しいと言われていた高校に入学できたのだから、姉も頑張っていたことは間違いない。でも、入学してからの姉は一向に成績が上がらず、家では自分の部屋にすることが多くなった。私はそんな姉を見て、姉より良い高校に行くことを目標に頑張った。部活も全力で取り組んだし、友だち関係も一度とあのときの「間違い」は犯さないように必死だった。家族の前では元気でいて、悪い状況と向き合おうとはせず、大好きな音楽で気を紛らわせ、勉強に部活に忙しいフリをした。

私は、「良い子」にならないといけなかった。明るく、何事にも

一生懸命で、結果も優秀な娘になる必要があった。そうすれば、家族も元通りになるとどこかで思っていたのかもしれない。「姉は頼れない。私は姉のようにはならない」。頭の中で、そんな思いが巡っていた。

しかし状況は良くなるどころか、悪化の一途をたどっていた。誰かに相談しようにも、面倒くさがられ、嫌われるかもしれないということへの恐怖がまさり、誰にも何も言わずに過ごした。好きなアーティストの歌詞に励まされ、ラジオの声になぐさめられた。私は少しも「良い子」ではなかった。

### 深まる溝

私と姉の間には、以前のような普通の姉妹の空気は流れなくなっていた。姉は体調が悪そうな日が多くなり、見るからに痩せていった。高校生だし、ダイエットでもしているのかと最初は思っていたが、その痩せぶりは健康的なものではなかった。しかし、食べる量は普通だし、菓子類などは驚くほど食べていた。「摂食障害」だった。

母親や私は薄々感じていたが、直接触れることはしなかった。もしかすると母は、行動を起こしていたのかもしれないが、姉をその「闇」から救うことはできなかった。姉は姉なりに、悲鳴を上げていたのだ。

私はそんな姉を見て心配でもあったが、やっぱり私が頑張らないと、という思いに駆られていた。私は地区で一番の進学校を目指した。将来何になりたいとか、その高校に行く目的とか、

そんなものはなかった。ただ、偏差値の高い所に行きたかった。中学三年生になり部活を引退した後、受験勉強にシフトした。担任の先生にも塾の先生にも、普通に受ければ大丈夫と太鼓判を押してもらい、私自身も手ごたえがあった。

そして、目標は現実になった。そのとき姉はすでに、県外の専門学校への進学を決めていた。母と祖母の、「進学校に行つて、塾まで通っていたのに…それに加えて一人暮らしで…」という会話が聞こえたとき、まだ高校に入学すらしていない私の中で、大学の選択肢もある程度絞られた。

とにかく、迷惑のかからない子になりたかった。しかし、どこかで自由に決めたいという思いもあったのだろう。私は姉のことを、家族のことなど考えず好き勝手していると感じてしまつて、溝は深まる一方だった。

### 気づいてほしい

自分の進路が決まり、少し余裕が生まれた私は、家を出ていく姉にひとつのメッセージを伝えた。口で言う勇氣はなく、紙に書いて渡した。それは「(摂食障害を)気づいていないと思うな。何かあるなら私にぶつければいい」。そんな怒りをこめた内容だったと思う。その病気で苦しんでいる人たちがいる中で、不謹慎であることは分かっているが、見るからにつらそうな姉に腹が立ったし、同時にうらやましくもあった。私は見た目も、発する言葉も健康そのものだったけど、でも本当は違うということに気づいてほしかった。

姉はいないのに、姉に関する事で母と祖母の間で口論になったこともあり、それを聞いていた私は、なんで私が聞かなきゃいけないんだ、という思いでいっぱいだった。悔しくて、悲しくて、自分の腕をかきむしった。口には出したくないけど分かってほしい。でも、誰にも分かるわけがない。どこまでもわがままな自分だった。

## 手紙

家を離れてから初めての夏に、姉が帰省してきた。まだ体は細かったが、顔は明るかった。姉は着実に良い方向へ進んでいるようだった。そしてこの夏から、毎年姉は手紙をくれるようになった。夏には私の誕生日があるので、手紙はいつも、「おめでとう」から始まっていた。最初の年はまだ苛立ちがあった。姉に対する気持ちを変えられることはできなかった。

次の手紙には、私に対する謝罪と、「嫌な姉」という言葉が書かれていた。それを見て私は初めて、姉のことを少しも助けてあげられていない自分に気づいた。さらに、私がずっと言っていたほしかったことも書かれていた。姉は好き勝手やるどころか、ちゃんと私のことを見てくれていたのだ。勝手に姉を憎んでいた自分を恥ずかしく思った。

それからは、私も姉に気持ちを書くようになった。姉の誕生日に合わせて書いたから、始まりはいつも、「おめでとう」だった。姉は得意の絵を添えてくれることが多かった。私はそれを真似するとひどいものになるから、得意の字で丁寧に書いた。大切

な曲の歌詞を書いたこともあった。私はようやく虚勢を張ることとはやめて、ちゃんとした「妹」になろうと思った。そして、今度こそ姉を支えようと決めた。

家族の状況は、学年が上がっても良い方には行かなかった。部屋で一人苦しくなるときもあつたが、味方がいるということだけで、それは大きな力になっていた。大学での一人暮らしは、やはり叶えられなかったが、私は自分で納得してこの大学を選んだ。

今でもたまに、姉のせいで私は一人暮らしができなかった、などと話すこともあるが、もちろんそれは本音ではない。受験のときは、郵送してまで手紙を届けて応援してくれた。合格した時には、「時々ネジをはずせ」という一見突拍子もない、でも私にとつてはとても大切なアドバイスをくれた。しかし、内容より何より、書いてくれる気持ちが嬉しかった。私たち姉妹の関係は、便箋の数だけ厚くなっていた。

## これから

今までの私は、姉に対して何もしてあげられていなかった。本当につらかったのは姉の方なのに、私はどこまでも被害者ぶっていた。今私は再び、昔のように姉と歩き出した。でも昔とは違い、姉の背中だけではなく、広く周りに目を向けていたいと思う。それで姉が下を向いているときも、障害物にぶつからないようにできたら最高だ。今でもつらいときはある。これからも必ずある。でも、私は必ず乗り越えられると思う。姉という、強い味

方を得たのだから。

今回自分史というテーマで書いてみて、思ったことがひとつある。それは、私はまだまだ家族と話し足りないということだ。今までずっと、家族の問題からは逃げてきた。自分が我慢すれば、どうにかなるだろうという考えがあった。でも、それでは改善しないということが、今までの結果として現状に表れている。

ただ、過去の自分は当時の自分なりに頑張っていたとも思う。だからこそ、その自分に、その頑張りもちゃんと意味があったと言えるようになりたい。そのためには、これからも頑張り続けないといけないと思う。

私は今、自分の過去や当時の気持ちを文章にしたことで、今まで心にはびこっていたものが少しとれたような気持ちでいる。自分のやるべきこと、とるべき行動が分かった気がする。と言っても、これからも弱い自分は顔を覗かせるだろう。それともうまく付き合って、自分なりに、楽しむことも忘れずに進んで行きたいと思う。私の目指す所はまだまだ先だ。